**降誕前第7主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年11月12日**

**「ステファノからサウロへ」**

**詩編31編6節**

**31:6 まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。**

**使徒言行録7章54～8章1節a**

 **7:54 人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。**

 **7:55 ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、**

 **7:56 「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。**

 **7:57 人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、**

 **7:58 都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。**

 **7:59 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。**

 **7:60 それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。**

**8:1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。**

**約1か月ぶりの使徒言行録となりました。改めて私たちはステファノの姿に目を向けて、心を向けていきたいと思います。その最後の姿から私たちは大切なことを教えられます。**

**ステファノは語りました。アブラハムから始まるイスラエルの民の信仰の姿と神様に従いえない弱さ、罪の姿を語りました。そしてそのような民であるにもかかわらず愛し続けて下さる神様の愛を語り続けました。不当に逮捕され、不当な裁判で偽証人まで立てて自分を陥れようとしているユダヤ人の権力者たちに向かって語りました。**

**「7:52 いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。**

 **7:53 天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。」**

**ステファノは力いっぱい語る説教をそのように結びました。「あなたたちいえ私たちのもとに来られた正しいお方であるイエス・キリストを殺したのはあなたたちなのだ。あなたたちこそがイエス・キリストを十字架に掛けて殺したんだ。」最後の言葉はそのような非常に厳しい断罪の言葉に聞こえます。しかし、それだけでなくてステファノは聞くユダヤ人権力者たちに悔い改めて欲しかったのです。かつてペンテコステの日にペトロの説教を聞いた多くの人々が心を打たれ「私たちはどうしたら良いのですか」とペトロに問い「悔い改めなさい。イエス・キリストの名によって洗礼を受けなさい」とペトロが答え、人々はペトロの言葉を受け入れて洗礼を受け教会の仲間に加わったということがありました。それと同じようにステファノもユダヤ人権力者たちに悔い改めて欲しいからこそ、このような厳しいことを語ったのです。**

**しかし、ステファノの説教を聞いていた人々は激しい怒りに駆られました。大声で叫びながら耳をふさぎ、ステファノめがけて襲い掛かり、都の外に引きずり出して石を投げつけたのです。ユダヤ人の最高法院の場では死刑判決を下すことは認められていませんでした。しかし、激しい怒りに駆られた彼らにはもうそのようなことはどうでもいい、怒りの感情に任せて皆でステファノに石を投げつけたのです。あまり使いたくない言葉ですが、簡単に言えば集団リンチです。想像するのも辛い場面です。**

**そのような中でステファノは聖霊に満たされて、天を見つめました。ステファノの目には天が開けて、人の子、すなわちイエス様が神様の右に立っておられるのが見えました。**

**私たちは使徒信条の中で「全能の父なる神の右に坐し、かしこより来りて」と告白をします。イエス様が天において父なる神様の右に座っておられるということを信仰の告白で致します。しかし、ステファノが見たのは神様の右に立っておられるイエス様のお姿です。座っていないで立っているイエス様、これはイエス様が立ち上がってこれからご自分のもとに来るステファノを両手を広げて迎えて下さっている様子を表していると言われます。「ステファノよくやった。あなたは十分に地上での使命を果たした。もう十分ですよ。さあ、安心して私のもとに来なさい」そのように優しい笑顔で迎えて下さっているのです。そのイエス様の姿をステファノは天を見つめて見たのです。**

**ステファノが見たものは、怒りに駆られて自分に石を投げつける人々の憎しみに満ちた顔ではありません。天を見つめたのです。ご自分を迎えるために立ち上がって両手を広げて待っていてくださるイエス様を見たのです。だからこそステファノはイエス様に祈ります。**

**「主イエスよ、私の霊をお受けください」と。さらに跪いて「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と執り成しの祈りをするのです。想像もつかないほどの痛みの中、薄れゆく意識の中でステファノは、自分に石を投げつけ、自分が何をしているのかわからない人々のためにイエス様に執り成しの祈りをするのです。そうして息を引き取ったのです。**

**これがキリスト教会最初の殉教者であるステファノの最後の姿です。罪を犯し続ける人々のどこまでも罪の赦しを願う姿、そして「私の霊をお受けください」と祈る姿は、ルカによる福音書が描くイエス様の十字架のお姿と驚くほどに似ているのです。**

**ルカによる福音書23：34(158頁)では十字架につけられたイエス様が、ご自分を十字架につけ嘲笑い侮辱する人々のために執り成しの祈りをされる祈りの言葉が描かれています。**

**「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」**

**そして十字架上で息を引き取る際にイエス様は大声で叫ばれました。46節です。**

**「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」**

**このイエス様の姿とステファノの姿が驚くほど似ていると思うのです。偶然でしょうか。たまたまでしょうか。私はそうは思わないのです。**

**ルカ福音書23：47以下にイエス様の最後のお姿を見た人たちの反応が描かれています。100人隊長は「本当に、この人は正しい人だった」と言って神様を讃美しました。見物に集まっていた群衆もイエス様の最後のお姿を見て胸を打ちながら帰っていきました。イエス様の最後のお姿に深く感じるものがあったのでしょう。**

**これは私の想像に過ぎないのかもしれませんが、ステファノはその中の一人であったのではないかと思うのです。イエス様の十字架の場面を見て、その最後のお姿を見て、大いに心を打たれ、胸を打ちながら帰って行ったのではないかと思うのです。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」ステファノはイエス様が罪の赦しを願われる、その「彼ら」の中に「自分」もいることに気づかされたのです。この私もまたまた神様に対して多くの罪を犯し続けて歩んでいる。その罪を赦してくださいと父なる神様にイエス様は祈られた。さらには「私の霊を御手にゆだねます」とその最後に至るまで自分を十字架につけた人を決して非難することなく、どこまでも従順に十字架上で息を引き取られた。それは「この私のために私の罪のためにイエス様が十字架に掛かって死んでくださった」ステファノはそのことに気づかされたのではないかと思います。**

**ステファノは12弟子ではありませんが、教会に連なり、礼拝をし、御言葉に聞き、祈りどこまでもイエス様に従う歩みをしたのだと思います。教会に忠実に仕え、霊と知恵とに満ちた7人として選ばれてイエス様に従う歩みをしていたのです。キリストに倣いて、いわば小さなキリストとして、イエス様の十字架と復活の愛を宣べ伝え、愛の業に励み、神と隣人を愛する歩みに励んでいたのです。**

**そんなステファノが殉教する場面、最後の場面を見ていた人がいます。**

**「証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。」（58節）「サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。」（8：1）まるで取って付けたかのようにこの場面に居合わせたサウロという若者は、後に偉大な伝道者となる使徒パウロのことです。サウロは目に焼き付いたステファノの最後の姿をまるで消そうとでもするかのようにこの後キリスト教会に大迫害をするのです。サウロはどんなに教会を迫害して荒らしてもステファノの姿は消えなかったでしょう。「主イエスよ、私の霊をお受けください」「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」石を投げつけられて息も絶え絶えになりながらもなお執り成しの祈りをするステファノの姿はどんなに消そうとしても決して消えなかったでしょうし、サウロが回心することに少なからず影響を与えたと思うのです。**

**でも、ステファノはサウロに影響を与えようと思ってイエス様の真似をしたのでは決してありません。ステファノはただただイエス様に信頼して従ってイエス様に全てをお委ねしたのです。自分を傷つける人たちの罪の赦しも全てをイエス様にお委ねしたのです。その信頼する姿がステファノの思いをはるかに超えたところでサウロに影響を与えやがて実を結ぶのです。**

**先週は召天者記念礼拝でした。私たちの信仰の先達たちの信仰のお姿を偲ぶと共にその信仰を私たちが受け継ぎ、さらに後の世代に受け継がれていくことを祈り願う礼拝をおこないました。私たちの信仰の先達たちもステファノと同じように後の世代に何か影響を与えようと思って教会生活信仰生活を送られたのではありません。イエス様の十字架と復活の愛に心打たれ、キリストに倣いて、小さなキリストとして精一杯イエス様の十字架と復活の愛の福音を伝え、神を愛し隣人を愛する愛の業に励まれたのです。そのお姿に私たちは影響を受け、「こういう信仰者になりたいな」と思わせられて、私たちもまた精一杯信仰生活教会生活を送るのです。信仰のバトンというのはそういう風にして渡されていくのではないかと思います。ステファノからサウロへ、信仰の先達たちから私たちへ、そして私たちから後の世代へと信仰のバトンが渡されていくのです。私たちはステファノが歩んだように、また私たちの信仰の先達たちが歩んだように、キリストに倣いて、小さなキリストとして、イエス様の十字架と復活の愛を宣べ伝え、愛の業に励み、神と隣人を愛する歩みに励んでいきましょう。**